

『二十一世紀の「老い」の思想 人生100年時代の世代責任』

まえがき

日本人はいま寿命100年の超高齢社会に生きている。2021年現在、65歳以上の老人は約3600万人を超え、総人口の3割弱を占めている。0歳児の平均寿命は約男82歳、女約89歳であり、現時点で70歳の人なら確実に90歳を超えることになる。しかしそうなると、私たちは30年以上にも及ぶ老後をどうやって過ごせばいいのだろうか。

吉田兼好のように潔く美しく死ぬことを願うか。モンテニョのように私的領分の中で老いを味わい尽くすか。『檀山節考』の老婆のように家族のために自己を犠牲にするか。寿命が50年だったらそれでよかった。あるいは、ボーヴォワールのように老人の権利を主張し、福祉の充実を求めるか。寿命70年ではそれは必要だった。それとも、アクティブ・エイジングを実践し、健康体操に努めて日々新しいことに挑戦し続けるか。寿命80年ならそれも可能だった。

ところが今日、寿命100年の老後を支えるはずの福祉国家が危機に瀕している。社会保障給付費の累積赤字が増加する一方、頼みの日本経済は低迷し続け、国家財政の借金返済が次世代に付け回されている。その中で国民が貧富の二極に階層分化し、老後破産が広がっている。目下、ポスト福祉国家の改革は急務を要し、加えて環境と経済の両立、コミュニティの再建、多様性の包摂、デジタル化への対応といった二十一世紀の課題群も解決を迫っている。

老人とは何者か。超高齢社会のマイノリティではなく、ポスト福祉国家の部外者でも、介護保険サービスのたんなるお客様でもない。むしろマジョリティであり、当事者であり、主人公である。しかも85歳までなら大半の老人はそれなりに元気である。とするなら、老人たちに求められるのは、虚ろな目をしてお迎えが来るのを待ったり、介護者にすべてを任せてひたすら受け身であったり、スバッと安楽死を選んだりするのではなく、二十一世紀の人生100年時代に相応しい老い方を模索し、老いのステージに応じてそれを実践することではないだろうか。

世の中ではいま終活を含めて老人論がブームとなっている。著名な文学者や、経営者、経済学者、社会学者、医師などが寿命100年を前提にしてマルチステージの人生について語っている。また、90歳前後のスーパー老人の刺激的な活躍ぶりも紹介されている。それらは80歳代以降の老い方を思い描く上で示唆に富み、明るい希望を与えてくれる。

しかし、その種の教訓や事例には老いの四つのステージ、すなわち老いの準備、活動の拡大、活動の縮小、死の準備といった異なるステージをトータルに捉える枠組みがない。それだけでなく、ポスト福祉国家の改革にはほとんど言及されず、二十一世紀の課題も断片的にしか取り上げられていない。少なくともそれらが体系立って捉えられていない。つまり、寿命１００年の二十一世紀に相応しい老人の生き方を支えるための「思想」が欠如しているということだ。

むろんこれまでも老いの思想はあった。しかし、古典と称される老いの思想はすべて寿命５０年を土台にしていた。また、老いをテーマにした近年の著作も古典を模倣するものばかりである。問題の焦点はたんなる老いの「思想」ではない。「寿命１００年となった二十一世紀」の老いの思想である。それはいまだどこにも存在していない。

それでは、寿命１００年の二十一世紀の老いの思想とは何か。その枠組みを提案するのが本書、「老成学」のプロジェクトである。これは五つの柱からなる。

第一の柱は過去の人々から受け継いだ共有財産を未来の人々に継承する責任である。これが老いの四つのステージを統合する。継承される公共的な共有財産のことを本書では「みんなのもの（レス・プブリカ）」と表現する。これは、生活の総体のうちで人々が価値あるものとして選び、継承してきた技術や、慣習、制度、理念等であり、経済、共同、公共、文化といった人間的活動のすべての領域をカバーする。このみんなのもの（レス・プブリカ）をふるいにかけて選り分ける基準が人々のもつ「幸福感のミニマム」であり、それを通じてみんなのもの（レス・プブリカ）はたえず変容する。

第二の柱は、みんなのもの（レス・プブリカ）の継承を担う「ライフサイクル年代集団」としての世代である。レス・プブリカを支えるのは死者集団と生者集団のあいだのコミュニケーションであり、これと生者集団同士の空間的コミュニケーションとの結節点に世代が位置する。世代の一員が個人であり、個人の時間的・空間的コミュニケーションは集団の時間的・空間的コミュニケーションの中から浮かび上がる。生者同士の空間的コミュニケーションは多方面に広がる相互的コミュニケーションのネットワークとしての「生活」であり、この展開の範囲と深まりに「豊かさ」が関連する。

第三の柱は、「コミュニケーション」では解釈する受け手側がイニシアティブをとるという見地である。この見地に立てば、片方が語りかける限りたとえその相手が語れなくてもコミュニケー

ションは続いていく。その中で語れない相手、例えば死者、寝たきりや認知症の老人、動物、サイボーグやロボットにも語りかけられるという役割が伴う。また、老いた自己のイメージの形成には「見られる／見せる」という美意識が不可欠であるが、ここに死者の視線が織り込まれると「死者から見られる」、「死んでからも生者から見られる」という世代意識が生じる。さらに、人生の最期には若い世代に自分の死に様を見せて人生を学んでもらうという役割が生じる。

第四の柱はポスト福祉国家の改革の鍵を握る「有償ボランティア」という働き方である。これは労働でもボランティアでもなく、老人と社会の共同領域にとって最も相応しい働き方であり、地域経済とコミュニティを活性化する。また、資本主義的市場経済のグローバル化によって引き起こされた「生活」の疎外に対しては、利潤を求めない有償ボランティアと、これを可能にする「ローカルマネー（地域通貨）」が有効である。他方、デジタル化に対してはナチュラルなものとの「創発的共生」という観点が求められる。

第五の柱は「シルバー共和主義」という政治的立場である。これがポスト福祉国家の改革を進める際の旗印になる。老人世代の政治的立場はこれまで「シルバー民主主義」と言われてきたが、そこには「みんなのもの（レス・プブリカ）」を継承する世代責任の観点が欠けている。そのため世代格差が放置され、世代間闘争を招いてきた。それに対してみんなのもの（レス・プブリカ）の継承を掲げ、個人の幸福の観点を織り込んで多世代協働をめざすのが「シルバー共和主義」であり、民主主義はその中に組み込まれる。

以上五つの柱からなる「老いの思想」は、ふつうの老人の日常感覚からはかけ離れているように見えるかもしれない。しかし、老人たちはいま日本の津々浦々で、若者世代への支援や、老人同士の互助、終活の話し合いを当たり前に行なっている。「老いの思想」はそのような日々の営みを反省し、一歩先の将来の形として言葉で定式化したものである。

「老いの思想」は、超高齢社会のマジョリティにして当事者、主人公である老人が世代責任を意識しながら、ポスト福祉国家の改革を担い、二十一世紀の課題に立ち向う中で、老いの四つのステージの異なる役割を統合するための条件を提案する。それらの条件が寿命100年の二十一世紀を生きる私たちの良き指針となることを著者として願っている。

老いの思想はたんなる老いについての思想ではない。誰もが老人に成るという観点から組み立てられた思想である。今日、老人の観点を抜きにして思想は成り立たない。二十一世紀の末に世界の人口はアフリカを除いて減少に転じる。本書では老いの思想を日本国内の範囲で考えてい

るが、少子高齢化の中で人口減少が始まった日本で言えることは、世界の他の国や地域でも同様に当てはまるだろう。その意味で老いの思想は二十一世紀の世界思想なのである。